

草くさのこ小舟ぶねでなが流された女おんなの子こ



幼いころに父と母を亡くしたわたしは、おぼさんに育ててもらいました。ところが、そのおぼさんときたら、ひどいのです。わたしは、カムイコロウシウと呼ばれていました。「神さまの召使い」という意味です。わたしの居場所は、家の隅この土間、囲炉裏の下座のそばの、ぼろのかたまりやら糸くずやらが散らかった、きたなくて臭いところでした。着るものといったら、毛皮一枚だけ。いつも、はだか同然です。

わたしは、毎日、水汲みに行かされました。きれいな水を汲んでくると、おぼさんは「なんでこんな水を汲んできたんだ」と、その水をわたしの頭からぶちまけます。そして「この役立たずが」と、わたしを踏みつけ、けとばすのです。わたしは転がされ、土煙があたり、体はいつも泥だらけになってしまいました。「いたいよお」と泣くと、おぼさんに、もつと怒られ、もつとひどくたたくられるのです。

たきぎ取りにも行かされました。焚きつけにちょうどいいだろうと思う小枝をいっしょくけんめい集めてくると、おぼさんは「なんでこんな腐れ枝をひろってきた」と怒り、「この役立たずが」と、小枝で、わたしをしたたかにたたきます。「いたいよお」と泣くと、もつともつとひどくたたかれるのです。

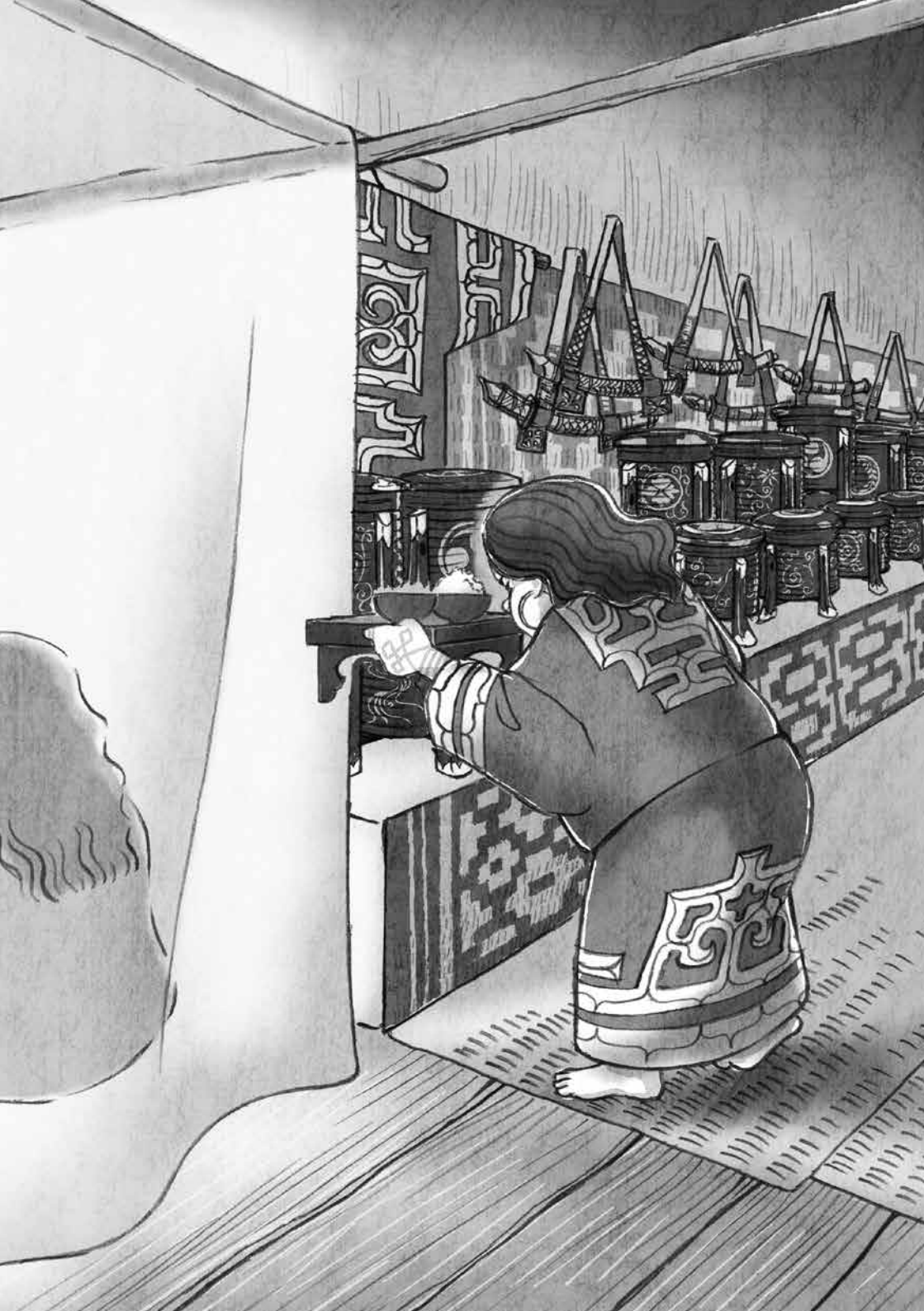
ところが、わたしが泥まじりのきたない水を汲んでくると、おぼさんは、なぜか怒りもしないで受けとります。腐った小枝をひろつてくると、うれしそうな顔さえるのです。

わたしには、わけがわかりませんでした。おぼさんは、きれいなものよりきたないものが、役に立つものより立たないもののほうが、すきなのでしょうか。そんなわけで、わたしは泥のかたまりのような姿で、物事の善し悪しもわからないままに、育ちました。

物心がつくようになると、おぼさんの家は、ほんとうはとてもきれいですばらしいところなのだと思ってきました。壁ぎわには、宝物がぎっしりと並べられ、低い崖のようにずうっとつづいています。金や銀の絵のついた漆の箱が何重にも並んで、キラキラ光っていました。りっぱな刀もつるされています。刀をつるしている帯にも美しい飾り布がつけられ、それがヒラヒラとはためいています。その刀も一本や二本ではありません。どつきりあるのです。細かい刺繍で模様がほどこされた上等な着物も、何枚もかかっています。それも、まぶしいくらいにりっぱな着物です。

この家のなかで、きたなくて臭いのは、わたしのいる家の隅っただけだったので。よく見ると、家には、つやつや光る絹の布で仕切られた小部屋がありました。おぼさんは、毎日毎日、とびきりおいしいものを作り、お椀にはごはんをうずたかく盛りつけて、うやうやしく小部屋へと運びます。

小部屋のなかには、いったいどんな人がいるのだろうか、とわたしはいつも思っていました。



ところが、わたしのごはんときたらいつも家の外で、しかも、犬たちといっしょです。おばさんがエサを投げると、犬たちは先を争って食らいつき、かみあうのです。わたしはもみくちやにされ、かまれて腹を立てた犬に、かみつかれてしまいます。血まみれになって「いたいよお」と泣くと、おばさんは丸太を持ってきて「こら、なんておぎょうぎの悪い犬たちだ」と犬をたたくふりをして、わぎとわたしをたたきます。「おばさん、わたしだよお、いたいよお」と泣き叫んで転がると、犬のごはんの器が転がって、残り物の汁が飛びちります。汁は脂でギトギトなので、わたしのは髪はベタベタ。やがてそれが固まって、もう人なのか、破れかますなのか、わからない始末です。

おばさんは、絹の小部屋に食べ物をとどけると、こんどは自分でごはんを食べます。山盛りのごはんや、シトというおだんごをたくさん食べるのに、わたしには、かけらの一つもくれません。夜になると囲炉裏の火も埋めてしまうので、わたしは寒さにふるえながら、お腹をすかせて横にならなければなりませんでした。とても眠れたものではありません。

けれど、わたしを助けてくれるふしぎな人がいました。いじわるなおばさんのいびきが聞こえてくるころ、囲炉裏の下座、戸口に近いほうから、まつ白な髪の毛のおばあさんが、すうつと出ていらつしやるのです。その髪は、まるでカムイに捧げるイナウのよう。ふさふさした髪がひるがえるたびに、稲妻がピカピカ光ります。お顔はいつも朝の太陽のように輝いています。光の糸で織りあげたような着物を、何枚も何枚も重ね着ていらつしやるので、まぶしさに目もくらみそうです。



おばあさんは囲炉裏から出てくると、膝をついて、音のしないようにそつとわたしに寄ってきて、光の着物の懐を広げてわたしを包みこんでくださいました。ああ、なんといいあたたかさでしょう。そして、大きなシトをまるごと一つ、くださいました。そのおいしいことといったらありません。一つでお腹がいっぱいになり、体の芯から力がわいてきます。

おばあさんは、毎晩毎晩、やっつけてきてくださるのです。おかげで、わたしは寒さ知らずで、お腹をすかせることもなく、朝を迎えることができました。

明け方になると、おばあさんはわたしを見て、はらはらと涙を流します。それは朝露のようにきらめきながら、わたしの体にこぼれおちました。おばあさんは、わたしをそつと抱きしめると、なごりおしそくに、すうつと囲炉裏のなかへと消えていってしまうのです。

このおばあさんのおかげで、わたしは元気に育つことができました。

そうやって、わたしが年ごろになったある日のことです。いつもは、夜遅くまでわたしをこき使ういじわるなおばあさんが、めずらしく「きょうは早く休みなさい」といって、わたしを家の隅つこのぼろのなかに押しこめました。そして、わたしが眠ったかどうかを、何度も確かめにくるのです。わたしはわざといびきをかいて、寝たふりをしました。

薄目を開けてそつと見ていると、おばあさんはごはんとシトを器に山盛りに盛りつけ、絹の小部屋に声をかけました。

「姫よ、姫よ、トウンプオルンマッよ、わたしのかわいい姪っ子よ。出ていらつしやい。だ

いじなお話をしてあげるから」

すると、衣ずれの音がして、だれかがゆっくり出てきました。年はわたしより少し上くらい、頭のでつぺんからつま先まで、すつかり飾りたてています。刺繍の着物を何枚も重ね、つやつや光る絹の帯を巻き、首には玉の首飾りのタマサイを、耳には金の耳飾りのニンカリをつけて、それはもうキラキラと光り輝いています。けれども、なぜかパツとしません。よく見れば、豪華なのは服装だけで、さしてきれいな人ではありませんでした。

「おお、なんと美しい。なんとりつぽに育つたことか」

おばあさんは、そういいながら、うれしそうに頭といわず腕といわず、なでまわしています。それから、用心深そうにわたしのほうをふり返り、わたしが眠っているかどうか、もう一度よく確かめました。わたしはじつとしたまま、寝息を立ててみせました。すると、おばあさんはようやく安心して、娘さんに話しかけました。

「おお、姫よ、美しき姫よ。これからする話をきいて、おどろいてはいけないよ」

「はい」

「おまえはね、わたしの姪ではない。ほんとうは、わたしの娘なんだ」

「えっ！ おばあさんが、わたしのおかあさんなの？」

「そうさ。おまえは、わたしがこのお腹を痛めて産んだ子なんだよ」

「そうなの！ それなら、どうして黙っていたの？ 姪だなんていつたの？」

「それにはね、深いわけがあるんだよ。これから話すから、よくお聞き」

そういつて、おぼさんが話したのは、こんな話でした。

「宝が流れる川トミサンベチのほとりにシヌタプカという、それはそれは美しい村があった。そこには、人間だけれど、カムイもかなわなような力を持った、すばらしい男がいたんだ。ところが、その人があんまりりっぱなので、みんなは妬んで、戦いをしかけてきた。そんなわけで、シヌタプカでは、戦が絶えなかつたんだよ。」

少しはなれたところに、イヨチという村もあった。シヌタプカほどでもないが、いい村だ。そこにもすばらしい男がいて、妬まれて戦いをしかけられ、やはり戦にあげられていた。戦に疲れた二人は、あるとき、話しあつたんだ。おたがいになかよくしようと。そして、そのしるしに、おたがいの妹を交換して、おたがいの嫁にすることにしようかね。

イヨチの男の娘は、シヌタプカに嫁いできた。じつはね、ここがシヌタプカ、イヨチから嫁いできた娘がわたしなんだよ。そして、生まれた子が、おまえだつたんだよ」

「まあ、そうだつたの？」

「そうさ。おまえのおとうさんはね、それはそれはりっぱで、たくましくて、みんなが見とれるほど美しい人だつたんだよ」

「おとうさんは、どうなつたの？」

「だんだんに話してやるから、まあ、お聞き。おまえのおとうさんのことを、天から見ている者がいる。狼のカムイの妹だ。その妹カムイが、うちの人を好きになつてしまつたんだよ。むりもないさ、ほんとうにすてきな人だつたからね。」

妹カムイは『あの人の嫁さんになりたい』といいたした。狼のカムイは大反対さ。『カムイはカムイと結婚するものだ。人間のところにお嫁に行くなんてとんでもない』とね。

妹カムイは泣きに泣き、寝こんでしまつたんだ。ごはんも食はず、とうとう息を引きとりそうになつたので、狼のカムイもさすがにあわてて、とうとう人間のところに嫁に行くことを、許してやつたのさ。妹カムイはそれを聞いたら、すっかり元気を取りもどして、とても喜んだ。そして、シヌタプカに嫁いできたんだよ。

だけど、わたしがさきに嫁にきていただろう。だから、妹カムイは二人目の妻さ。それに、トウンプオルンマツ、そのころには、おまえももういぶん大きくなつていたんだよ」

「かわいそうに。くやしかつたでしょうね。でも、なぜわたしを姪っ子だと？」

「ゆつくり話すから、まあ、お聞き。さて、新しく嫁いできた妹カムイにも、しばらくして赤ん坊が生まれた。女の子だよ」

「その子は、どこにいるの？」

「ほら、あのぼろくずのなかで眠っている召使いのカムイコロウシウが、その娘さ」

「えつ？ まあ、あんなきたない、みつともない娘がわたしの妹なの？ まあ、やだ！ で、おとうさんとその妹カムイは、どこへ行つてしまつたの？」

「それがね、二人は、まだ若いうちに、手に手を取つて天の世界へ帰つてしまつたんだよ。」

『人間の世界は苦勞が多すぎるから、二人で天の世界へいつて、しあわせに暮らそう。真実の夫婦になろう』つて」

「まあ、ひどい。おかあさんとわたしを置いて？」

「ああ、ずいぶんだろう。それで、このわたしが、残された二人の娘を育てることになったんだ。実の娘のおまえトランプオルンマツと、妹カムイの子であるカムイコロウシウをね」

「まあ、おかあさん、たいへんだったわねえ」

みんな、はじめて聞く話でした。わたしのおかあさんは狼のカムイの妹だったのです。そんなことは、まるで知りませんでした。わたしは眠ったふりをしながら、耳を澄ませました。「わたしがイヨチからシヌタブカに嫁いできたとき、シヌタブカからもイヨチへと一人の娘が嫁いでいった。おまえのおばさん、つまり、おとうさんの妹だよ。イヨチにいる、わたしのいさんのお嫁さんになったんだ。やがて、その夫婦に、息子が二人生まれた。二人ともりつばに育つたが、ことに弟は、カムイのようなりつばな男になったんだ。」

おまえのおとうさんは、天の世界に行く前に、わたしにこう遺言したんだよ。『下の娘が年ごろになったら、イヨチの甥っ子の、弟のほうに嫁がせてやってくれ。そして、宝が流れる川トミサンペチの上流から下流までをすべて、夫婦で治めさせるのだ』とね。後から生まれたあの娘にそれだけのものをあげるんだもの、先に生まれたわたしの娘には、どんなすばらしいものをくれるのだろうか、わたしはドキドキしながら、つぎの言葉を待ったんだ。そうしたら、『上の娘はイヨチの甥っ子の兄のほうに嫁がせて、イヨチの村を治めさせてやればよい』って」

「まあ、ひどい。妹は、この美しいシヌタブカをぜんぶもらえるのに、姉のわたしには、イヨチの村へ嫁にいけつていうの？ あんまりだわ」

「そうなんだよ、ひどいえこひいきだろう。それでね、わたしは考えたんだよ。おまえをイヨチの弟のほうに嫁がせてやろう、とね。そこで、作戦を立てたのさ」

「どんな？」

「妹カムイの娘と、自分の娘を入れかえることにしたんだよ。まず、『わたしの娘は、お乳が足りなくて死んでしまいました』とみんなに嘘をついた。それから、『残された妹カムイの娘を、わが娘のように大切に育てます』といったのだ。みんな、信じてくれたよ。自分の娘でもないのに、ずいぶん大切に育てていると、人からほめられたくらいさ」

「まあ、みんなすつかりだまされたのね」と、娘はクククと笑いました。

「そうそう、そのとおりの。ころつとだまされたよ」とおばさんも、笑いました。

「そんなわけで、妹カムイの娘のカムイコロウシウは召使いにすることにして、うんときぎ使つてやったんだ。早く死ねばいいと思つて、ろくに食べ物もやらず、着物も着せなかったんだが、どういうわけだろう、しぶとい娘だ。なぜだか、死なないんだ」

「まあ、それならいつそひと思いに……と娘がいったので、わたしはぎよつとしました。

「そうだよ。わたしもいつそ、刃で斬り殺してやろうか、槍で突き殺してやろうかと、何度思つただろう。けれど、血しぶきが高くあがれば、きつとカムイたちに気づかれてしまう。それが怖くてね、どうしてもできなかった。でもまあ、あんなきたない娘に育つたから、もう心配はいらないよ。だれも、あんな化け物を、嫁にほしがつたりはしないさ」

すると、ねえさんは、わたしをジロジロ見ていました。

「ほんとにひどいわね。とてもカムイの血が流れているようには見えないわ」

「だろう。まるで破れかますだ」とおばさんもいい、二人でケラケラ笑うのです。

「おまえが一人前の娘になったことは、もうイヨチの村にも風の便りで伝わっている。そろそろ、イヨチから迎えがくるころだ。そうしたら、いつしよにイヨチに行こう。イヨチの甥っ子の弟は、ポンイヨチウンクルというんだ。きつとおまえを気に入らさうよ。わたしが、手塩にかけて育てたんだからね。安心おし。なにしろ、おまえは、おとうさんが決めたいなづけ、つてことになっているんだから」

「まあ、うれしい。ありがとう、おかあさん！」とねえさんは、おばさんに抱きつきました。

「こちらら。おかあさんと呼んではだめよ。おばさまとお呼びなさい」

「あ、そうだったわね。はいっ、おかあさ……、いえ、お・ば・さ・ま」

「そうそう、それでいい、姫よ、トゥンポールンマツよ、わたしのかわいい姪っ子よ」

そして、二人は笑いながら、ごちそうを食べはじめました。

おばさんが、ふと思いだしたように、こういいました。

「そうそう、一つ忘れていた。狼のカムイの妹は、イムをする人だった」

「あら、イムつてなあに？」

「ちよつとふしぎなことなんだ。びつくりするとね、手からドングリやクリが飛びだしたり、きゆうに人が変わったようになって、こちらがいうことと、正反対のことをしたりいつたり

するんだ。みんな、おもしろがつて笑ったり、からかったりするんだよ」

「へえ、そうなの」

「妹カムイの娘なら、イムをしてみせないかね」

「あら、たいへん。わたしにできるかしら？」

「だいじょうぶ。心配しなくていい。わたしがイムをするふりを教えてあげよう。むずかしいことはない。さかさまをいえばいいんだ」

「どんなふうに？」

「『わたしは食べる』といわれたら、『わたしは食べない。絶対に食べない』つていえばいい。『わたしは食べない』つていわれたら『わたしは食べる』といつて、どしどし食べなさい。わかっただかい？」

おばさんはねえさんにこまごまと教え、ねえさんはそれをやってみました。楽しそうな笑い声も聞こえます。

「そうそう、その調子。それならみんな、おまえをイムする人だと思っただろう」

「みんなも、楽しんでくれるわよね」

「ああ、そうだとお。もう安心だ。きょうはもう、おやすみなさい」

「はい、おばさん。おやすみなさい」

それから間もなく、二人の寝息が聞こえてきました。

夜がふけると、囲炉裏の下座のほうから、いつものようにまつ白な髪のおばあさんが現れて、わたしに、シトを一つくださいました。そして、わたしを着物のなかに抱き、髪をなで体をなでながら、こうお話ししてくださいましたのです。

「おばさんの話を聞いて、さぞかしびっくりしただろうね」

わたしは、コクリとうなずきました。

「たしかに、おまえは狼のカムイの妹の娘なんだ。カムイの血を半分引いているんだよ」

「おばあさんは、わたしのおかあさんを知っているの？」

「知っているとも。おまえのおかあさんはね、美しいだけではなく、たいへん心がけのいい人で、いつでも、囲炉裏のまわりを片づけ、ピカピカに磨いてくれていた。お酒やおいしいものが手に入ると、まっ先にわたしにお供えしてくれて、とてもいじにしてくれたんだよ。だからね、わたしは、おまえを守ってやることにしたのさ」

「そうだったの。ありがとう、おばあさん」

「さあ、これをごらん」

おばあさんは、囲炉裏の、ごみの底から、大きな袋を取りだしました。

「これは、おまえのおかあさんのものだよ。きれいな着物に、首飾りや耳飾り、魔除けの刺繍の鉢巻きもある。あのいじわるなおばあさんの目には見えないように、袋におまじないをかけて隠しておいたんだ。これはみんな、おまえのものだよ」

おばあさんは、袋を開いて、宝物を取りだしました。

それは、この家にあるどんな着物よりもきれいだだったので、わたしはびっくりしてしまいました。それから、おばあさんは、わたしの目をじっと見ていうのです。

「これから、大切なことをいうから、よくお聞き。明日、おまえの身におそろしいことが起きる。おばあさんが、おまえを亡き者にしようとして、ひどいことをするんだ。でも、心配いらない。わたしがきつと守ってあげるからね。信じて、運命に身をまかせればいい」

おばあさんは、朝までずっとわたしを抱いてあたためてくれると、ポロポロと涙を流し、わたしをぎゅうつと抱きしめ、いつものように囲炉裏のなかへと消えていきました。そのときわたしには、おばあさんの話がなんのことか、まだわかっていなかったのです。

つぎの朝、イヨチの村から使いの人が訪ねてきました。

「イヨチの村長から伝言です。『息子は二人とも一人前になりました。神々にお礼を申しあげる儀式をしたいと思います。酒を仕込んだので、できあがるまでの二、三日、ぜひ娘さんにきていただき、ゆつくりとつもる話をしたいのです』とのことですよ」

おばあさんは、飛びあがるほど喜びました。そして、拜まんばかりに、こういいました。

「それはそれは、ありがとうございます。すぐに、カムイの血を引く姪っ子連れて、イヨチにおうかがいします。どうか、さきに帰って、そうお伝えください」

「それは、うれしいお返事。さっそく帰って、村長に伝えます」

使いの人が帰ると、おばあさんは、いつになくこにこして、わたしのところにやってきま



した。そして「これをお食べ」と、シトを半分くれたのです。わたしはびつくりしました。おぼさんの手から、食べ物をもたらしたのは、生まれてはじめてのことなのです。

「ほんとに、くれるの？ 食べていいの？」

「もちろんだとも、わたしのかわいいカムイコロウシウ」

はじめてやさしくしてもらい、うれしくてなりません。だいにだいに、少しずつかじると、おぼさんに「さあさあ、早くお食べ」とせかされました。おぼさんは、猫なで声でこういました。

「おまえのために、すてきな草の小舟を作つてやつたんだよ。すばらしい村に行くための舟だよ。その村に行けばね、おいしいものを好きなだけ食べられるし、きれいな着物もいくらでも着られるんだ。お前を、舟に乗せて、その村に連れていつてあげようね」

わたしはうれしくて、思わず「はいっ」と返事をしました。

けれども、見せてくれた草の小舟は、ごぎを折りたたんで作つたような粗末なもので、ちやんと浮かぶのか、心配です。おぼさんは、ごみ捨てでもするように、わたしの寝床にあるものを一切合切さらうようにして舟に詰めこみました。そして、舟を小脇に抱え、わたしの手を引いて海へとくだっていったのです。

浜につくと、おぼさんはわたしを草の小舟に乗せてくれました。そして、えいっと舟を海へと押し出したのです。

舟は、すべるように大海原へと流れだしました。おばさんは、みるみる小さくなって、じきに、見えなくなつてしまいました。それほど、草の小舟は速かつたのです。軽々と波を越え、すいすい走ります。おもしろくてなりません。こわいことは、なにもありませんでした。やわらかな潮風が、とてもいい気持ちです。

やがて、日が沈み、満天の星が輝きました。わたしは星を見ながら、ぼろくずにくるまれ、揺りかごに揺られているように、気持ちよく眠つてしまいました。

ガツンとなにかに当たり、目を覚ましました。草の小舟は、砂浜に乗りあげていました。空はもう明るくなりかかっています。遠くに、屋根が並ぶ大きな村が見えました。村へとつづく道から、だれかが歩いてきます。わたしはあわてて、ぼろのなかに隠れました。

ザツザツと砂を踏む音がして、その人は舟のそばでびたりと止まりました。ぼろのあいだからそつとのぞいてみて、びつくりしました。男の人を見たのは、そのときが生まれてはじめてでした。こわくて声も出ません。でも、とてもりつばな人です。その人はふしぎそうな顔をして、草の小舟のあちらを見たり、こちらを見たりしています。なかをのぞきこまれたときに、うつかりその人と目が合つてしまいました。

あつ、と思つたときには、もう遅かつたのです。見つかつてしまいました。その人はぼろをかきわけ、わたしを見ると、さもいやなものでも見たように顔をしかめました。そして、前から後ろから、わたしを調べるように、ジロジロながめました。はずかしくなつて思わず

うつむくと、その人はいきなり草の小舟ごとわたしを抱きあげました。そして、えいっと跳んだのです。

体がすうつと持ちあがりました。あつと思つてもなく、鳥のように空をかけていました。おそろおそろ下をのぞくと、ずうつと下のほうに、大きな村が見えました。そのむこう、川の上流のほうには、りつばなお屋敷が見えます。その人は、それを目がけて飛んでいきます。そして、鳥のようにすうつと舞いおりたのでした。

軽やかに降りたつたのに、その人の足が地に着くと、地響きのような大きな音が鳴り響きました。体は光を放ち、白い靄がまとわりついています。これはふつうの人ではないな、カムイかもしれない、とわたしは思いました。

その人は、お屋敷のなかにのしのし入つていきました。囲炉裏のそばに、これも人とは思われないほど美しい女の人がいました。女の人は、すっかりおどろいて、手にしていたものをポーンと投げだしてしまいました。

「なんだ、そんなにおどろいて、イムまでして」

わたしはそれを聞いて、ああこれがイムというものなのかな、と思いました。

「おにいさまこそ、そんなに大きな音を立てて、どうなさつたんですか」

「まあ、聞いてくれ。夕べの夢見が悪かった。胸さわぎがして、夜明けに浜に行つてみたんだ。すると、こんなものが打ち寄せられていたんだよ。ほら、みてごらん」

「まあ、おそろしい。なんですか、これは」

「獣のようにも、化け物のようにも見えるんだが、どうだ、この瞳は。まるで人間のようではないか。いや、澄みきっていてカムイのようでさえある。悪いカムイなら悪い気を放つはずだが、それも感じない。こんなものが、いったいどこから流れついたのか」

「どこからきたんでしようねえ」

「しかも、ごらん、この草の小舟を。とても海に浮いていられるような代物ではない。それなのに、この舟で、はるばる海を渡ってきたようだ。ふしぎなことだ」

「まあ、どこかのカムイに守られているんでしようか」

「ところで、イヨチの村長の家に、シヌタブカの村から、お客がやってきたそうだな」

「はい。村長の親類の方だそうです。年ごろの娘さんと、そのおばさんです。でも、みなさん、なにやらお困りのようでした」

「どうしたんだ」

「娘さんは、カムイの血を引いていて、弟さんのいいなづけなんだそうです。でも、その娘さんに会ってみたら、思ったよりずっと年上で、着物や飾りはりつぱだけど、顔形はよくないんですって。とても、カムイの血を引いているようには見えないと」

「そうか。では、会いにいつて、わたしがよく確かめてやろう。妹よ、おまえもいつしよにおいで」

「はい、おにいさま。でも、その前に、この化け物になにか食べさせてやりましょうよ。ずいぶんお腹をすかしているようですよ」

「女の人は、わたしに大盛りのお膳を用意してくれました。かぶりつきたいほど腹ぺこでしたが、わたしは、お膳を高く捧げ、低く捧げ、きちんとお祈りをしました。」

「まあ、こんな姿なのに、人間の礼儀作法を知っているようですよ、おにいさま」

「これはまた、ふしぎなことだ」

「どこからきたのでしようね」

「まったくだ。村長の家のいいなづけがきた日に、ちょうどここへやってきたというのも、ふしぎな巡りあわせだ」

「お祈りを終えて、わたしはごちそうにむしゃぶりつきました。口いっぱいにはおぼつていると、後ろでクスクス笑い声がかかります。」

「まあ、やつぱり化け物は化け物ですね、おにいさま」

「ああ、でも、なんだかかわいい化け物だな」

「お腹いっぱい食べても、まだごちそうが余っていたので、わたしはそれをおみやげに包んで、草の小舟のなかにだいにしまいました。」

「おやまあ、残り物をあんなにだいにしまうなんて……」

「よつぽどひどい目にあつてきたんだろうな。かわいそうになあ」

「男は深くため息をつき、わたしにいいました。」

「ごちそうなら、まだまだあるから、心配しないでいいよ。ところで、おまえ、名前はなんというんだい」

きゆうに聞かれて、びつくりしてしまいました。

「こわがらなくていい。わたしは川上に住むコタンパウンクルだよ。こちらは妹のコタンパウンクルだ。おまえはだれだい？ 名前を、教えてくれないか」

はずかしいやら、おそろしいやらで、わたしはうつむいたまま、毛皮の袖をかんで、もじもじしていました。

「おやおや、この子は口がきけないようだ。しかたないな、わたしが名前をつけてやろう。キナポンチブというのはどうだい。草の小舟という意味だよ。いい名前だろう」

わたしは小さくうなずきました。家では「召使い」と呼ばれていたので、新しい名前をもらつてうれしかったのです。

「わたしと妹は、これから村長の家に行く。ここに食べ物を用意しておくから、お腹がすいたら食べていいんだよ。じきにもどつてくるからね」

そういつて、二人は出かけていきました。

あらためてお屋敷のなかをよく見ると、なんとすばらしいのでしょうか。シヌタブカのおばさんの家もすばらしいと思いましたが、それをほるかにしのぐ美しさです。

きれいだなあ、と思つてみると、まぶたが重くなつてきました。お腹がいつぱいになったので、眠たくなつてきたのです。わたしは、そのまま寝入つてしまいました。

足音がして、目が覚めました。刀の鏢がかちかちと当たる音が近づいてきます。だれかが

戸を開けてなかに入つてきました。けれども、白い霧に包まれていて、よく見えません。いつしうけんめい見つめているうちに、やつと姿が見えてきました。なんと、わたしと同じ十五歳くらいの若者ではありませんか。さっきの人もりつぱでしたが、それをほるかに超えるりつぱさです。きれいな着物に金の帯、すばらしい刀を下げて、お顔は太陽のように光り輝いています。まるでカムイのようだ、とわたしは思いました。

その人は、きよろきよろとなにかを探すようにあたりを見まわし、わたしを見つけると、つかつかと歩みよつてきました。そして、ひとしきりジロジロとわたしを見て、さもいやそのな顔をして、こういいました。

「おまえか、コタンパウンクルとコタンパウンクルが話していた化け物というのは。なるほど、こいつはたしかに化け物だ。まつ黒で、まるで破れかますだ。キナポンチブと名づけたといつていたが、おまえはいつたい、なに者だ？ どこからきた？」

わたしはうつむいて、いじいじと毛皮の袖をかんでいました。
「答えないつもりか。よおし、もしもおまえが悪いカムイなら、草の小舟のなかから出てはこれないはずだ。であれば、わたしがこの刀で、いますぐ切り刻んでくれよう」

そういわれたとたん、かつてに体が動いて、わたしは草の小舟から飛びだしてしまいました。びつくりしていると、若者は大笑いをし、わたしをしげしげと見ていました。

「おかしいな。見れば見るほど、悪いカムイとは思われない。草の小舟で沈みもせずに、海を渡つてこれたというならば、きつと、なにかわけがあるはずだ。話してくれないか」

若者はそういつて、わたしをじつと見つめました。吸い込まれるようなその眼差しに射すくめられたとたん、ふしぎなことに、わたしの喉の奥から、言葉がいきなりあふれだしてきました。おばさんにひどくいじめられたこと、囲炉裏の下座のおばあさんに助けってもらったこと、わたしの身の上話など、泣きながら、洗いざらい語りました。

若者は、おどろきに目を丸くし、聞きながら、滝のような涙を流しました。

「そうか、そうか。そんな目にあつたのか。かわいそうに、かわいそうに。悪かつた、悪かつた。助けてやれずに、悪かつた」

若者の涙が、雨のようにわたしに降りそそぎます。

「なんで、あなたが？ あやまることなんて、なにもありません」

「いいや、わたしがぼんやりしていたのがいけなかつたのだ。それにしても、カムイの血を引くそなたが、どうしてそんな醜い姿をしているか。ほんとうはどんな姿なのだろう。ああ、早くほんとうの姿にもどしてやらねば」

若者は立ちあがり、やおらわたしを抱きあげて草の小舟に座らせると、小舟ごと小脇に抱えて外に飛びだしました。そして、鳥のように空へと飛びたつたのです。

地面がみるみる遠ざかります。月明かりに照らされた家々の屋根が、ずらつとならんできます。若者は、星々のなかへとさらに高くのぼりました。下を見ると、そこだけ鏡のように白々と光る川が、大きくうねりながら流れていました。すると若者は、鳥が大地に降りたつように、その川のほとりに、すうつと舞いおりていつたのです。

若者はいきなり帯を解き、みずから服を脱ぎました。月明かりのなか、その体は白く輝いて、まぶしいほどです。びつくりしていると、若者はわたしに飛びかかり、一気に毛皮の衣をはぎ取りました。そして、丸はだかになつたわたしを抱え、ざぶんと川に飛びこんだのです。

月明かりの水のなか、わたしは水の底までもぐり、また水の面にあがり、川上まで泳ぎ、また川下にもどりました。水の流れが、わたしの体を滑っていきます。若者はわたしを川のなかに座らせると、「つらかつただろう。よくがまんしてきたね」といつて、わたしの体をやさしく洗ってくれました。黒々とした塊が水に溶け、はがれ落ちていきます。川下へと、まっ黒な泥水がぐんぐん流れていきました。

すると、黒い垢の下から、まぶしいほど白い素肌が表れてきたのです。垢がすつかりはがれ落ちると、わたしの体も、若者のはだかのように白くなりました。まるで、内側から光を放っているようです。わたしは生まれかわつたように感じました。

若者は、わたしを抱えて水からあがると、自分の着物を一枚、わたしの肩にかけてくれました。そして、草の小舟のなかに座らせてくれたのです。若者は、身づくろいをする、きりりと帯をしめ、草の小舟もろとも、わたしを小脇に抱えました。そして、ふたたび空へと飛びたつたのです。夜風が、わたしの素肌をなでていきます。わたしははじめて、風の甘い香りをかぎました。山の頂に、りつばな館が見えてきました。

若者は、ひらりと館に舞いおりました。なかに入ると、これもまた、なんとりつばなことでしょうか。宝物がピカピカと稲妻のように輝いて、目もくらみそうです。



若者は、草の小舟のぼろくずを、棒で探りました。すると、大きな袋が出てきました。亡くなったおかあさんの形見の入った、あの袋です。袋の口を開けると、パツと光が射しました。首飾りや耳飾りがキラキラきらめき、その光が館の宝物に跳ねかえって、すべてがいつそうまぶしくなりました。袋の底には、狼のなめし革でできた着物もありました。

若者はその手で、なめし革の着物を着せてくれました。襟や裾に模様入りの金属の板のついた、おかあさんの形見の小袖です。きりりと帯を締め、刺繍の鉢巻きをしめ、首飾りと耳飾りもつけてくれました。背筋を伸ばしてすつくと立ってみると、自分でも見違えるようです。わたしはやつと、ほんとうのわたしにもどれたのです。そのとたん、わたしのまわりに白い霽が立ちこめ、小さな稲妻がいくつもきらめきました。

すると、どうでしょう、いままでの苦しかった暮らしが、走馬燈のように思いだされてきたのです。つぎからつぎに、つらくて悲しい暮らしの思い出があふれだし、生まれてはじめて、くやしさがこみあげてきました。おばさんの悪だくみで、わたしは長いこと、獣のように扱われ、化け物のような姿になりました。それがいま、やつと人間らしい姿にもどれたのは、この若者のおかげなのです。胸がいつぱいになり、涙があふれかえりました。

「おお、いとしい人よ」と若者は、わたしを抱きしめ、やさしくなでてくれました。そつと口づけをして、わたしの目を見ながら、こういいました。

「もうだいじょうぶだよ。だから、これからわたしがいうことを、よくお聞き」

わたしは、コクリとうなずきました。

「イヨチのいさんが、わたしのいいなづけを迎えに、シヌタプカのおぼのところに使いを出してくれた。カムイノミの儀式と宴のための酒を仕込んだので、それができるまでのあいだ、わたしとゆつくり語りあうようにと、はからってくれたんだ。いいなづけは、狼のカムイの妹の血を引いていると聞いていたので、どんな娘がくるだろうかと、わたしはとても楽しみにしていたんだ。

まず、いさんがその娘を迎えに出たんだが、いさんがいうには、娘は、少しも美しくなく、年もわたしよりずっと上に見えるという。ふるまいにも品がなく、カムイらしいところがまるでないともでいい、会わないほうがいいというんだ。わたしは、ほんとうだろうかと思つて、物陰からそつと見てみたんだが、いさんのいうことは、ほんとうだった。

どうしてこんなことになったんだろうかと思つていたが、そなたに出会い、合点がいった。すべては、おぼの悪だくみだったんだね。あの娘はにせ者、そなたこそが、わたしの真実のいいなづけ、狼のカムイの妹の娘なんだね。なんとひどいおぼだろう。こんな目にあわされて、ほんとうにかわいそうに」

若者はそういつて、ハラハラと涙を流しました。

「では、あなたがわたしの……」

「そうだよ、そなたのいいなづけのポニヨチウンクルだ」

わたしはびつくりして、息も止まりそうになりました。わたしを救つてくださったカムイのようなこのお方が、わたしのいいなづけだったなんて！ わたしは、思わず、その胸に

飛びこみました。若者は、わたしをしつかり抱きしめてくれました。

そのときです。村のほうから、はじけるような笑い声が起りました。

「ああ、あれは、にせ者がにせのイムをして、みんなが喜んでいるのだ。だまされているとも知らずにね。明日の夕方、本家に人が集まって儀式をする。だいじょうぶ、それまでに、わたしがあいつらの正体をあばいてやろう」

若者はそういつて、またわたしを抱きしめました。

その夜、わたしたちは囲炉裏の火に見守られ、いままでのことをゆつくり語りあいました。そして、しずかに眠りについたのでした。

つぎの日のことです。ポニヨチウンクルは、わたしをコタンの中のまんなかにある本家へと連れていってくれました。そこにはすでに、たくさんの人が集まっていました。わたしたちが白い靄をまとっているせいで、みんなからは、わたしたちがよく見えないようです。こちらからは、靄をすかして、みんなが見えます。囲炉裏ばたに座っているりつばな人は、きつとおにいさんのポロイヨチウンクルでしょう。顔つきも体つきもよく似ています。けれど、弟のポニヨチウンクルのほうが、よほどりつばに見えました。きのう、わたしを海で助けてくれたコタンパウンクルとその美しい妹のコタンパウンマツも、座っています。二人とも、ひとときわ目立つほどりつばです。

人々の輪のなかには、にせのいいなづけのトゥンポルンマツがいました。いちばんい

い席に座って、お姫さまのようにいばっています。となりにには、あのいじわるなおばさんもいました。二人とも、カムイノミのためにいちばんいい着物を着て、首飾りから耳飾りまで、なにからなにまで身につけ、すっかり着飾っています。トゥンプオルンマツねえさんは、家でみたときには、もう少しましに思えたのですが、こうしてみると、着飾っているだけにかえって本人が貧相でみつともなく思えます。

わたしたちを包む白い靄がだんだん晴れてくると、人々はやつとわたしたち二人を見つけ、びつくりして目を丸くしました。いじわるなおばが、わたしのいいなづけにすり寄ってきて、「まあ、あなたさまがわが姪っ子のいいなづけ、ポンイヨチウンクルさまですね。なんとごりつばなのでしょう。聞きしに勝るすばらしいお方です。こちらが、わたしが大切に大切に、宝のように育ててきたわが姪、あなたさまのいいなづけの……」といいかけたとき、わたしのいいなづけは、おばさんを押しとどめて、こういったのです。

「お待ちください。あなたにお聞きしたいことがあるのです」

「なんなりと」

「真実だけを答えていただきたい」

「もちろんです」

「嘘をついたら命はないものと覚悟してください」

「まあ、なにをそんなにこわいお顔で」と、おばさんは引きつったように笑い、「笑いごとではありません。それでもよろしいですね」

「いいですとも。嘘いつわりはもうしません」

「では聞か、あなたが連れてきたこの娘、まことに狼のカムイの妹の娘なのか」

「も、もちろんでございます」

「では、自分の娘はどうしたのか」

「乳が足りず、赤ん坊のときに亡くなりました」

「では、カムイコロウシウと呼んで、家で召使いにしていた娘は、だれなのか」

「いったい、なんのことでしょうか」とおばさんは、しらばつくれました。

「溺れさせようとして、草の小舟に乗せて海に流した娘は、どこのだれなのか」

「まあ、なにをおっしゃっているんですか」

「それなら、これを見ろ」

いいなづけは、やおら外に出て、あの草の小舟を持ってくると、おばさんの目の前に投げだしました。

「見ろ、これだ。ぼろの詰まったこの舟だ。これでも、知らないといいはるのか」

さすがのおばさんも青くなつてふるえだしました。トゥンプオルンマツもまつ青です。

「カムイの血を引く者であれば、イムをするだろう。さあ、どうだ。してみろ」

いいなづけは、大きな杯をとると、なみなみと酒を注ぎ、トゥンプオルンマツの目の前でゆらゆらと揺らしました。そして、歌うようにこういったのです。

「ほうら、これをよく見ろ。わたしは杯を受けとらない、ぜつたいに受けとらない」

トウンポオルンマツは、目をまん丸くしてブルブルふるえています。いいなづけは、ようしやなくつつけます。

「わたしは杯を受けとらない、ぜつたいに受けとらない」

トウンポオルンマツはかたまつたまま、声も出せません。

すると、いいなづけはカラカラと笑つていいました。

「そなた、狼のカムイの妹の血を引く者ではなかったのか。いいか、よき血筋の者に代々受けつがれるイム、まことのイムとは、このことだ」

いいなづけは、わたしの目の前に杯を持つてくると、呪文のように唱えました。

「わたしは杯を受けとらない、ぜつたいに受けとらない」

目の前でゆらゆら揺れる杯を見ているうちに、なんだか心がふわつと軽くなって、わたしは思わず立ちあがっていました。

「わたしは杯を受けとる、ぜつたいに受けとる。受けとつて飲みほすの」と叫んで、杯を奪おうとすると、いいなづけはわざと後ずさり、杯を右に左によけて、なかなか渡してくれません。それを見て、みんな大笑いです。

人々が「まあまあ、これはみごとなイムだ」「ひさしぶりに見た」「狼のカムイの妹がイムしたのを見て以来だ」などといいながら喜び、わたしを拝みさえるのです。

わたしはとうとう、杯を受けとることができました。そこで、宙に高く捧げ、低く捧げて、ぐいっと飲みほしました。わつと拍手がおきました。

ああ、お酒とは、なんとおいしいものでしょうか！ 心がのびのびして、頭のてっぺんからつま先まで、すっかりいい気持ちになりました。

「みなもの、見たか。この娘こそがわたしの真のいいなづけ、狼のカムイの妹の娘だ」

わたしはハッとわれに返り、囲炉裏ばたにヘナヘナと座りこみました。すると、いいなづけは槍を手に取り、バンツと床に突いて、カッコウのように高らかに告げました。

「トウンポオルンマツ。おまえは、カムイの血など引いていない。この欲ばりなおばの実の娘だっ！」

そして、わたしがどんな目にあつてきたのか、ことこまかに、みんなに知らせたのでした。「この話が真実であることは、わたしがよく知っている。なぜなら犬のように育てられたこの娘を川で洗つて、ほんとうの姿にしてやったのは、このわたしだからだっ！」

宴に集まつていた人々は、たいへんびつくりして、魂が飛びだしてしまわないようにと、あわてて自分の鼻をつまみ、口をふさぎました。

人々はみな立ちあがり、男の人たちは、わたしのまわりをぐるぐるまわりながら、ワアワアと戦場のような大声をあげ、わたしを刀で切るふりや、槍で突くまねをしました。それは、魔をはらつてくれるおまじないの踊りでした。女の人たちは、みんなわたしを気の毒がり、かわいそうだかわいそうだと、口々にいいながら、手に手を取りあつて泣きました。

おばさんとトウンポオルンマツは、青ざめるのを通りこして、土くれのような顔色になつて、ふるえていました。わたしは、おばさんにいいました。



「おばさん。どうしてわたしにあんなにつらく当たったの？ ごはんもくれないで、化け物みたいに育てたの？ なぜ、わたしを草の小舟に乗せて流したの？ 殺すつもりだったの？ 囲炉裏の下座のおばあさんが、わたしを助けてくださったから、わたしは生きのびて、草の小舟でも溺れもせずに、浜に流れつきました。そして、イヨチのみなさんに助けてもらって、ほんとうのわたしにもどることができました。おばさん、わたしだって、できればあなたに親孝行をしたかった。あなたが亡くなつてからも、いつまでも崇めたてまつりたかった。でも、あんな仕打ちを受けては、それができません。とても残念です。悲しいです」

すると、みんなが「そうだ、そうだ」といいました。いいなづけのポナイヨチウンクルは、怒り心頭、いじわるなおばさんの髪を手に巻きつけ、もう片方の手でにせ者の娘の髪の毛を巻きつけ、天にとどろくような大声でいいました。

「トウンポールンマツよ。悪い母親に育てられて気の毒だったが、おまえの心根さえよければ、こんなにひどいことには、ならなかったはずだ。狼のカミイの妹の家で、それほどまでの悪事を働いたとは、おまえたち二人とも、どうにも許されるものではない。せめていまここでわびて、魂だけは清らかになつて、よいところへと行きなさい。さあ、表に出るんだ」

いいなづけはそういうと、二人の髪をぐいと引っぱつて、表に引きずりだしました。

しばらくすると、西のほうから一つ、また一つと、死んだ魂が去っていくすさまじい音かとどろきました。その音が消えると、曇っていた空がぱつと割れ、すっかり晴れわたつて青空になったのです。二人の魂は、天へのぼつていったのでした。

わたしのいいなづけ、ポニヨチウンクルがもどつてくると、女たちはいつせいに立ちあがり、家のなかを隅々まで掃き清めました。そして、彼の手を取ると、もつとも位の高い席、囲炉裏の右座に座らせました。それから、人々がそれぞれの座について、カムイノミの祈りを捧げたのです。

カムイノミが終わると、みんなほつとして、お酒をくみかわしました。できたての、おいしいお酒です。みんなは、わたしがしてきた苦勞を、口々にねぎらってくれました。宴もたけなわになると、いいなづけが大きな声でいいました。

「みなもの、よく聞いてほしい。シヌタプカの娘トウンポオルンマツは、ほんとうならわたしの兄に嫁ぐはずだった。実の母がいかにも悪い女だろうと、あの娘さえ心がけがよければ、いまごろは、兄の嫁となっていたに違いない。ところが、トウンポオルンマツは罰を受け、天にのぼってしまった。

だが、ここにすばらしい人がいる。わがいいなづけを助けてくれたコタンパウンマツだ。心も姿も美しい乙女だ。あなたをおいてほかに、わが兄にふさわしい女性はいない。どうか、兄の嫁になってくださらないか」

コタンパウンマツはおどろきながらも、つつしんでそれを受け、深々とおじぎをしました。ポニヨチウンクルのおにいさんときたら、それはもうとびあがるほど喜んだのです。

「コタンパウンマツが嫁に行くとなれば、兄のコタンパウンクルは一人になってしまふ。村いちばんの器量よしの娘に、嫁になつてもらいたいのだが、どうだろうか、その娘さん」

名指しされた娘さんは、うやうやしく進み出ると、うれしそうにその申し出を受けました。コタンパウンクルときたら、それはもうとびあがるほど喜んだのです。

「わたしはこの娘、悪いおばにいじめられて草の小舟で流されてきた娘を嫁にしたい」

わたしは、うれしさではちきれそうになり、深く深くわが夫になるポニヨチウンクルを拜んだのでした。

わあつと歓声がわき、みんなはポニヨチウンクルの采配に感心し、新しい夫婦が三組も生まれることを、とても喜び、祝いました。

新しく夫婦になる六人は、婚礼をするために、シヌタプカのわたしの育つた家に行きました。母である狼のカムイの妹が住んでいた家です。

まずは、あの絹張りの小部屋を取りはずして、さっぱりしました。そして、結婚の宴の準備にかかったのです。あらたに妻になるコタンパウンマツとイヨチの娘とわたしとの三人で、杵を突いてたくさんのシトを作ったり、お酒を仕込んだりしました。男たちは、カムイに捧げるイナウをたくさん作り、家の内にと飾りつけました。

準備が整うと、みんなを呼んできて、三組の婚礼の始まりです。村の人は、みんなで行列をしてぐるぐるまわり、刀で切るまねや、槍で突くまねをして、わたしの魔除けをし、家のなかをすつかり清めてくれました。

それからカムイノミが始まりました。カムイたちに祈りをささげる儀式です。



わたしのいいなづけは、自分で作ったきれいなイナウを立てて、囲炉裏の下座のおばあさんにお酒を捧げながら、感謝の言葉を述べました。

そして、いよいよ宴の始まりです。ごちそうをいただき、お酒をくみかわし、みんなで歌ったり踊ったりしました。宴は三日ほどつづき、みなとても喜んで、それぞれの家に帰っていきました。

そして、家には、わたしとポニヨチウクルの二人だけになったのです。

わたしは、お米を炊きました。そして、きれいな漆のお椀にごはんをうずたく盛り、漆のお盆にのせて、うやうやしく頭の高さまでかけ、いとしいポニヨチウクルのもとに運びました。

ポニヨチウクルは、お椀を受けると、高く捧げ、低く捧げ、お祈りをして、ゆつくりと半分食べました。そして、わたしに渡してくれたのです。わたしも、同じようにお椀を高く捧げ、低く捧げ、お祈りをして、残りの半分をいただきました。

これで、二人はほんとうの夫婦になったのです。

それからというものの、夫は、いつも息がかかるほど近くにいてくれて、わたしを大切にし、かわいがってくれました。頭のとつぺんからつま先まで、わたしをきれいに飾りたて、だいにしてくれました。しかも、夫は狩りが上手で、山に行くと、たくさん獲物を獲ってきました。まるで、獲物が自分の方から夫の弓矢に当たってくるようなくあいです。夫は、

獲物のいちばんいいところを、わたしにくれました。わたしは、山菜などをせっせととつてきては料理し、いちばんおいしいところを、まつさきに夫に食べさせてあげました。

あんな育てられ方をしましたから、わたしは刺繍のやり方も知らなかったのですが、試みにやってみると、たいへんきれいにできました。ですから、カムイの雲がいくつもいくつも立ちのぼるような、りっぱな刺繍をたくさんしました。

夫もまた、手先が器用な人で、刀の鞘を脇目もふらずに何日も彫っていました。炉ばたにきて、気楽に彫ることもあり、そんなときは、わたしもそばで刺繍をしながら、ふたりでおしゃべりをして、楽しく過ごしました。

そうしているうちに、子どもにも恵まれました。夫は子どもたちをたいへんかわいがり、赤ん坊のときなどは、わたしが抱いているよりも、夫が抱いているときのほうが長いくらいでした。昼も夜も、夫が歌う子守歌が、家のなかにやさしく響いていました。

そのせいか、子どもたちはみな気立がよく、働き者のいい子に育ちました。息子たちは狩りが上手で、娘たちは畑づくりが上手でした。ですから、わたしたち夫婦は、若いうちから軽い仕事しかさせてもらえないほどでした。夫は狩りの獲物の肉裂きや皮張りを、わたしは畑の穂ちぎりをするくらいです。すっかり楽をさせてもらいました。

同じときに結婚した、ポロイヨチウンクルの夫婦も、コタンパウンクルの夫婦も、子どもに恵まれ、豊かに暮らしました。わたしたちはときどきお酒を造り、たがいに招きあつて、行ったりきたりしました。

夫は、いつも忘れずに、囲炉裏の下座のおばあさんに、捧げ物をしてくれました。わたしも、囲炉裏のまわりは、いつもきれいに片づけ、炉縁もピカピカに磨きました。そして、春夏秋冬、おいしいものが出てくれば、だれよりもいちばん最初に捧げました。

囲炉裏の下座のおばあさんは、あれから二度と姿をあらわすことはありませんでした。しかし、いつもどこかでわたしたちを見て、守ってくださったのだと思います。ですから、困ったこともつらいこともなく、なにを食べたいとも思わず、なにがほしいとも思わないほど満ち足りて暮らしてきたのです。そして、こんなふうになりつばに年老いることができました。

子どもたちよ。だから、あなたたちはみな、狼のカムイの血を引く者。この草の小舟のお話を忘れずに、先祖の物語として、おまえたちのそのまた子どもたちへと、語り伝えてください。そして、たがいに妬むことなく、なかよく暮らすのですよ。

女の子は、囲炉裏のまわりをいつもきれいに片づけ、お掃除をします。そして、囲炉裏の下座のおばあさんに捧げ物をして、しっかりお祈りしなさいね。そうすれば、きつとしあわせになれますよ。

と、トミサンペチの狼のカムイの血を引くおばあさんが、歌うように語りました。